

現時局下に於ける幼児保育 (二)

倉 橋 惣 三

第三 建設性の教育

戦ふと共に建設が本務である現時局に於て、將來の國民が最も充實せる建設の性格をもたねばならぬことはいふまでもありません。耐久性は建設の時にむしろ一層大切であります。

所謂、ぢきにくたばらぬ、參らぬことは、戦に於て大切であります。同時に、相手が力で此方の力にぶつかつて來ない建設の時に、特に必要であるといへます。

建設性は如何なる所に特色があり、幼児に於てどこに養へるか考へてみませう。簡單にいへば、建設性は破壊性の反對であります。子供の中に破壊性があれば、これを訂正してゆくことも必要であります。殊に本能は破壊的方面にあらはれるのも稀ではないのであります。本能は本來は建設的な事が多いのですが、蜘蛛や蟻が巢をつくるのを見るに何ぞ建設的な本能でありませう。しかし、本能の生活

は、その建設をさせてゆく中心がやはり本能でありますから、本能の自然性に基いて途中でやめてしまふことも免かれ得ないことでもあります。そこで本能にのみ信頼して建設性を養ふ事が出来ません。さう考へるに本能的耐久を意志的耐久にうつさねばならぬといふ先程の論法にならざるに、目的が建設の中心になるといへるのであります。建設は本能的にもやれるし、また本能的に楽しいことでもあります。積木を積んでゆくのにも本能がさせる。さうしてさうする事が事としても面白いのであります。しかし本能にこゝまるならば、嫌になつたら何時でもやめることでもあります。他にさんくうつることでもあります。積木をしてゐる中に、積木を投げる亂棒な遊びに遷るのはその一例であります。即ち目的が入つてゐないのであります。勿論、目的といふものには二つの意味があります。作つてさうするといふ事もそれでありませんが、私のいふのはそれではなく、今この生活は何を目當に集中してゐるかといふことに用ひるので

あります。前の意味の目的は、私の用ひてゐる言葉で効果意識といふ言葉にあてはまります。こゝでいふのは積木遊びの教育的効果ではなく、門をつくらう、家をつくらうといふ事であります。

目的とは一つの縦の系列であります。幾つかの途中目的があります。子供の前にこゝまで系列の目的を先に置くのは難しい問題であります。途中までの目的が立つて次の目的が立つのであつて、先づ下關を以てにして、名古屋にやらうさか、大阪にやらうさか途中目的を追ふ事は子供には出来ないであります。積木でいふと、先づ門をつくらう、それではお家もつくりませうといふやうに、目的の發展であります。子供に目的系列の完成を期する事は出来ませんが、名古屋まで目的でゆくか、たゞふら〜こ散歩でゆくか、これは大きな問題であります。子供の生活を、いつでも目的へむかつて引きつけられた生活に導びくことが大切であります。

心理的にいふと目的にいろ〜あります。門をつくらうといふのを漠然たる目的、抽象目的といひます。又、心像があつて、これをつくらうといふのですものもありません。その形まで先に出来るといふのは、餘程特別な型のある子供ですが、こゝにかく門を作るか橋をつくるかそこはは

つきりしてゐなければなりません。そこはかきなく竝べ居れば門となりけり(笑聲)といふのではないのであります。私共が、誘導保育といふこゝををしきりに申しますが、誘導保育といふ言葉は保育の仕方からつけた言葉ですが、これを受ける方からいへば目的保育であります。常に生活活動がそこへ指し示されてゐるのです。手技の場合にこれが最もよく出ます。泥をこねてゐるたら、苺になつた、大砲の弾になつた、これも小さい子供の生活活動として否定出来ないこゝであります。しかし苺をつくりませうねといつて作る、これは目的へ子供の生活活動を向けてゐるのであります。粘土を與へて何でも作りなさいといふのは、豊富な生活活動に、想像力にまかせてゐる點では價値があります。しかしこの場合、子供が何もつくりません場合もありません。自發想像力をうながすといふ事であるが、つくりたくもないお話が出て来る、「皆さん、作る子を作らない子とごちらがよい子でせう」(笑聲)なごいひ出す先生がある。また「さうして作らないの。あなたが作らない先生泣きたくなるわよ」等といふ泣き落しもある。(笑聲)子供は何かを作らんご欲し、しかもしまひまで何もつくれない子があります。又しまひになつて、ちよ〜こ〜まごめる癖がつく。さういふ癖がつくさういふ癖がつくのであ

ります。(笑) 筆創作活動の豊かでないものに課題が與へられる。勞働的活動になるが、反對の場合は創作活動を目的に向つて動かすことになります。そこで子供の場合、確かに子供がこれをしたくない見當がついてゐる場合——この見當がつかないといふのはあまりに氣がきかない——、自發の自由を與へる。先生が子供のつくりたがつてゐるあれを知つてゐて、「あれをつくりたいのでせう。ぢやそれを、おつくりなさい。此方から作りなさいといふ課題になりますか。らいひませんよ」いふのはよろしいのであります。が、自發の美名にかくれて先生が目的を持たないさまぐれ保育をしてはなりません。

苺をつくりませうといつて作つてゐる中に、「先生、これは大砲のたまよ」ともつてくることもあつてせう。その時、先生は何さいひませうか。自己責任感からいへば、苺をつくれといつたのに大砲の弾をつくることは何事か、切腹に價するさいふわけでありますが、この時局に苺などさいふ時には、大砲の弾でもいふではありませんか、何の權威あつて苺を強ひますか。たゞ果物店をつくるので苺をつくるのは目的の必然性があります。かういふ時、弾丸をつくつたのでは困りますが。

ある目的へ向つて、自己の生活活動を集中することが建

設であります。今、日本では自己の興味、自己の必要で動いてゐる人はない、何一つさいへさも皆建設であります。

この、目的に向つて集中してゆく、こゝに建設性の根據があるのであります。子供ですから、勿論お互の腕前でこの目的の生活活動が二つに分けられないことがあります。子供は目的、手段さいふ分化はなく、生活活動の純一性で出て來ます。これを理解しなければならぬ。先生が「苺でせう」さいふ子供は何をつくらうと思はないじやないが、苺をつくらうとしてゐた事がはつきりしてきたさいふ事になる。先生の力で目的を抜き出してくるさいふのは保育の技巧であります。やはり生活を目的に集中してゆくさいふ一つの方向を辿つてゐるわけであります。今日では目的へ向つて工夫するのが建設性で、工夫力そのもの、面白さ、奇抜さで終らせては意味がないのであります。思考力があつても建設の出來ぬ人間は時局下役に立たぬのであります。普段なら、伸びるまゝに伸びてよいが、現時局下においてはこの方面が工夫されねばならなりません。觀察が、その物自體の觀察でなく入り入れる事もふくむ。ながめる事だけでなく作ることも育てることも觀察であります。しかしこゝではもう一步すすめて目的に向つて生活しつゝ觀察する、こゝに意義がある。漠然觀察、目的觀察、こゝに意義があるのであります。「皆さん、竹はどんな性質のもの

でせうか「さいふ」子供等はいろ／＼答へる。各方面に展開していきいます。それを先生がまごめてゆく、これも觀察であります。竹を使つて手技をする、その創作活動に於て竹を觀察する。こゝでは皮を中にしてまげるか外にしてまげるかさいふ問題である、竹の使用觀察であります。子供に水鐵砲をつくつてやるのに、穴をあけるこゝろで皆失敗してしまふ先生がある。これは竹の強い纖維にいきなり穴をあけようとするから無理なので、先に細く切込みを入れてやれば何でもないのであります。即ち目的へ向つての觀察をしますから、製作に必要な事柄に於て觀察が出来る。目的に向つて建設するのであります。今、南方へ澤山いつて居りますが、何が目的で南へ行くのか。南へ行つたら何かあるだらうで地面を杖で叩いて歩いてみてもわかりません。こゝにはきつこ石油がある、石炭が出ねばならぬ筈ださいふはつきりした目的をもつていつてこそはじめて成功するのであります。建設は目的をもつてはじめて完成するのであります。誘導保育は心的効果からいへば目的保育であるさいふこを、こゝに再び繰返して申上げねばならぬさいふ氣持が致すのであります。

建設性の教育をする時にかゝる導き方をするのであります。が、これでも小さい子供のすることが一々まごまりのついた建設になるさいはいへません。それを一々やかましくい

ふこも出来ません。そこで一つの問題は、子供が十分建設的に活動してゐないのを手傳つてゆくののであります。この手傳ひ方に二つあります。一つはその出来榮をよくしてやる爲に手傳つてゐる。勿論この中で自ら子供に發明せしむるこゝろもある。二は、出来榮を狙はぬが、子供が如何にもうまくやらないので手を借してやるさいふのであります。子供は助力されるこゝによつて發明するこゝがありますからこれも決して無價値ではありません。

大人は子供よりうまいものであるこゝはきまつてゐます。けれども子供よりうまいのみではなく、建設性の多いのが大人であります。この豊かな建設性で手傳ふのである。先生が建設へ手傳つてやるこゝ子供は、「こんなふうまくゆかないこゝ思つてゐたにあゝうれしい。私のかねて希つた通りにして下さつた。また私の氣のつかなかつたこゝを出して下さつた」こ思ふ。やがてその子供に建設性そのものゝ教育が與へられてゆくのであります。我々はさういふ意味に於て、手を借してやるのも必要だこ思ひます。ちぐはぐなものを建設にまで仕上げてゆくさいふ先生でなければなりません。その人が出るこゝになつてゆくさいふ先生でなければならぬこ思ふのであります。

一方に大きな戦をつゞけてゆき、しかもその間にも非常

に大がゝりな建設をしてゆくといふのが所謂現時局の本質を三すれば、それに適應する教育として耐久性及び建設性これが主なる問題である事は申し盡しました。即ち我々はかかる目的を以て、あの幼児の將來に期待するのであります。本當の耐久性、建設性が性格の中にしつかり三出来るその基を幼い時に啓培し、培ひ養つておきたいといふのであります。三ころで所謂耐久性、建設性、言葉が大層むづかしい。しかしそれは子供の生活にあらはれる時は、そんなしつめらしい形を三る三は限りません。耐久性の耐はこらへるではありませんが、これは大變きつ事である、久はそこらに或る時間をおくのでむしろゆつたりした意味にもなりません。子供を強く育てる意味に於て、從來家庭や幼稚園でよくなさる三思ひますが、お前は強い、三いふ言ひ方があります。さうする三子供は齒をくひしぱり、拳を握り所謂我慢するのであります。殊に所謂痛いこ三をする時はさういふ仕向け方をします。我慢、つよいこ三これは戦争、建設に必要なこ三いふまでもありません。しかしこの我慢するこ三は、今の苦しさに耐へる事ですがこ三にいふ耐久性はそれのみでなく、もつ三ゆ三りのある生活の仕方をひまます。中には大變我慢強いが、後ではぐつたりする人があります。もう一寸だよ、三いふ一寸だよにつられて我慢してゐるのがあります。しかしこ三でいふのは、その強さを以

て久しきに耐へるこ三であります。その強さはさう強くない三も久しきに耐へる方がもつ三大切かもしれません。その意味で耐久性を養ふには子供をしてぢきに行きつもらせぬ、すぐにやめない三いふ事が大切であります。力を出さないですぐやめるのもありますが、は——つ三力んでもすぐやめてしまふのは、力んだゝけはえらいが、やはりすぐやめるのであります。大人にもさういふ人があります。全力を盡した、だから後は何もなし(笑聲)三いふのがある。これでは久しきに耐へる道ではありません。終始ゆきつまらない、ゆ三りをもつてゐる、すぐに投げ出さない、すぐに捨てない、この生活が必要であります。三の位瞬間に力を入れた三してもほうり出してしまはない、一度力を抜いても投げ出さず他に道がなからうか三いふのであります。これは他からみる三悠長ではありますが、最後はかくてこそ建設も出来るのだ三思ふのであります。

日本人自身反省してゐる一つの缺陷は、刹那的に力を出すがじり／＼やる耐久性がない、三いふこ三であります。子供三何かやつてゐる気がつくこ三は、殊に熱心な子供程耐久性がない三いふ事でありませう。一寸躓つ／＼三すぐほうり出す。そこで先生の指導法は、絶えず子供に力を出させる事は必要だが、なげ出しさうになる一寸前に——投げ出した後では駄目だし、すつ三前の必要もない。——一寸お

預けしておきませう、何も今しなくても後でしたらよい三十寸ゆきりを興へることは、生活に一つのよいゆきりを興へることであります。やり出したらしまひまでやれ、さいふ言葉は全般的には正しいのですが、一氣呵成にやれさいふ意味に誤りこられるとよくない。幼い子供は、一氣呵成にやる事が多く、先生の中にも一氣呵成の方が多くいらつしやるでせう。教育自體もまあ、このばしておくゆつくりしたやり方が少いのであります。若い人は一氣呵成的であります。するに、子供は力を出す方は養はれますが、突き當つてかうゆく道もあらうかさいふやうな事は経験されません。殊に東京の幼稚園は江戸つ子保育(笑聲)の名でこれがおこりやすいのであります。お年寄になるに、まあいゝくで、すけてしまふ、これはごがいけないのか。力を出させずに援けてしまふことが非教育的なのであります。うか、待つさいふその教育が出来るかどうかと大切なのであります。ごき行きづまらない性質は大人にも大切であります。ごきに投げ出す人が多くなつては、長期建設は出来ません。今日の戦争は一氣呵成ではいけません。ソ聯の戦をみるに實にはがゆい。冬を越し、かなり退却もしてゐるのであります。まごろつこしいが、彼等はごつご待つてゐるごが出来るのであります。

子供をみて、この傾向のあるご、足りぬごを見分け、

この傾向を養ひたいものであります。建設さいふのはつまりそれである。何ごかして建設しなければならぬのであります。この氣持は一つやり方で行きつまつた事を、他のやり方もあるかもしれぬと思ふ行き方であります。これを我々の言葉で「よく考へてごらんさい」といひます。

例へば、手技で彌次郎兵衛を作る、あゝ面倒くさいごする子供もゐるかもしれませぬ。さういふ時、出来るまではそこ動かさないふ工合に、「よく考へてごらんさい」、「ごその子を一室に入れておいて、時々ごうか、出来たか」ご先生がのぞいてみる、(笑聲)これはやはり始終おひつめられてゐて、ゆきりではあります。これに對して、彌次郎兵衛が今日出来なくても、明日出来ればいゝぢやないかさいふゆきりを持つのであります。そして一度やめるのであります。しかし何時か出来るだらうさいふなげやりではない、この場合、明日は必ずしませうご約束して先生はほうつておいてはなりません。明日必ずしなければならぬ。(笑聲)そして子供は明日、そんなに追ひつめられた氣持でなくやれるのであります。私のいふのはこれを狙ふのであります。齒をくひしはる耐久性、建設性の話ではあります。しかも悠々閑々でもない、如何にしてかういふ性格が養はれるか考へてみませう。

先に、建設は目的に向つて一切の生活をつけてゆくのだ

を申しました。しかも子供は大人の程、目的が先に分離してゐるのではない、途中で見出される事が多いを申しました。今日のは更に發展するのであります。目的は見失つてはならないが、自分との距離を相當におけるのであります。「そろそろ参らうを存する」を堪能でやりますが、この歩き方は夏やるを汗も出ないでいゝと思ふ。(笑聲)この「そろそろ参らうを存する」をいふのは非常に目的に則してゐます。

これは、從來保育でいはれる自發とごんな關係にあるでせうか。自發とは此方から出てゆく生活であります。他發、他律、他動ではいけないのであります。しかし目的を自分のものにしてゐるところに自發があり得るので、自發が單なる彈力的活動であるとは限りません。その目的に向つてゆるり／＼歩む事、落著いた自發を申しませうか、焦らぬ自發、興奮せぬ自發、反動的力の發動でない自發を申しませうか、自發は興奮、思ひつき、或は反動的になりやすいものであります。これでは決して建設性にはなりません、自發は決して捨てませんが、自發の勇しさ、勢よさだけでこれを解釋してはなりません。從來の心理學的言葉では根氣を申しました。根氣とはもちつゞく力そのものでありますから、どうしても生活が續いて居ります。でありますか

ら一應中斷しても續くといふ耐久性を必しも一樣ではないのであります。

おしまひのないのが現時局であります。濟んだら休むといふ事のない時には、中へ中へを休みを入れてゆかねばなりません。中斷してそれでも目的を失はないといふのは、これは根氣とは少し違ふのであります。これを耐久性を申したのであります。これも亦大切な性格でありますから、これを子供に是非養ひたいと思ふのであります。